

畜産試験場 機関評価結果

令和4年10月27日付け新産第141号で諮問を受け、同日開催した農業関係試験研究機関評価部会における調査審議の結果は、機関運営に係る評価実施結果のとおりである。
以下に、その大要を記す。

1 評価対象機関及び評価結果

(1) 評価対象機関

畜産試験場

(2) 評価結果

(単位:名)

評価項目	評価基準				
	S	A	B	C	D
(1) 研究機関の運営方針・重点分野	1	2	1		
(2) 研究開発・技術支援等体制		1	3		
(3) 研究者の確保・育成		1	3		
(4) 研究施設・設備等, 研究環境の整備			1	3	
(5) 共同研究等産学官連携による研究内容の充実		1	3		
(6) 研究成果 (成果普及関係業務を含む) の状況					
イ 産業・社会的ニーズに貢献しうる成果が充分にあがっているか		3	1		
ロ 研究成果の普及体制が適切に構築されているか。また, 普及実績は充分か		4			
(7) 技術支援関係業務等の状況					
イ 当該技術支援業務が地域産業の高度化を直接的に促進する業務として組織全体の業務の中に明確に位置づけられているか		2	2		
ロ 当該技術支援業務が機関における明確な方針の下で地域産業の高度化に充分貢献し得るものとなっているか	1	2	1		
(8) 研究マネジメント	1	2	1		
(9) 総合評価	1	2	1		

評価項目	評価結果
<p>(1) 研究機関の運営方針・重点分野 試験研究機関等が策定した運営方針，重点的な研究分野・技術支援分野は，内外の科学技術の動向，産業・社会的ニーズに基づく地域への貢献，当試験研究機関の研究ポテンシャル等に照らして適切か</p>	優れている
<p>(2) 研究開発・技術支援等体制 当試験研究機関の組織体制及び研究者の配置は，効率的・効果的な研究を行う上で相応しい体制となっているか。また，研究開発当業務の進捗状況管理等が適切に行われているか</p>	適切である
<p>(3) 研究者の確保・育成 優秀な研究を確保・育成するための適切な方策が講じられているか。また，研究者の意欲を喚起する業績評価及び処遇（予算配分，表彰等）が適切に行われているか</p>	適切である
<p>(4) 研究施設・設備等，研究環境の整備 研究者の創造性が十分発揮しうる環境整備（施設・設備等）・研究環境（制度面の充実，組織内の緊密な連携等）になっているか</p>	見直しが必要
<p>(5) 共同研究等産学官連携による研究内容の充実（効率的な研究を推進する観点からの効果的な役割分担） 産学官との連携・交流が効果的（外部ポテンシャルの活用）に行われ，研究に生かされているか</p>	適切である
(6) 研究成果（成果普及関係業務を含む）の状況	
<p>イ 産業・社会的ニーズに貢献しうる成果が充分にあがっているか</p>	適切である
<p>ロ 研究成果の普及体制が適切に構築されているか。また，普及実績は十分か</p>	優れている
(7) 技術支援関係業務等の状況	
<p>イ 当該技術支援業務が地域産業の高度化を直接的に促進する業務として組織全体の業務の中に明確に位置づけられているか</p>	適切である
<p>ロ 当該技術支援業務が機関における明確な方針の下で地域産業の高度化に十分貢献し得るものとなっているか</p>	適切である
<p>(8) 研究マネジメント 当試験研究機関の業務全般に関し，円滑な機関運営の実現に向けた場所長ほか執行部の研究マネジメントは適切か</p>	優れている
<p>(9) 総合評価 公設試験研究機関として地域への貢献という観点から，明確な目標に基づき，十分にその使命を果たしているか</p>	優れている

令和4年度宮城県試験研究機関評価委員会

(第1回農業関係試験研究機関評価部会)

機関運営に係る評価実施結果

1 評価委員

評価委員名	所属・職名等	摘要
中村 聡	公立大学法人 宮城大学食産業学群 教授	部会長
菊地 郁	公立大学法人 宮城大学食産業学群 准教授	副部会長
麻生 久	国立大学法人 東北大学大学院農学研究科 教授	委員 (欠席)
西條 由美恵	農業者	委員
佐々木 均	農事組合法人仙台イーストカンントリー 代表理事	委員

2 評価対象機関

畜産試験場

3 評価項目

- (1) 研究機関の運営方針・重点分野
- (2) 研究開発・技術支援等体制
- (3) 研究者の確保・育成
- (4) 研究施設・設備等, 研究環境の整備
- (5) 共同研究等産学官連携による研究内容の充実
- (6) 研究成果の状況
- (7) 技術支援関係業務等の状況
- (8) 研究マネジメント
- (9) 総合評価

4 評価結果 (コメント)

(1) 研究機関の運営方針・重点分野

- ・第9次農業試験研究推進構想に即しているとともに, 昨今の社会的ニーズに対応した研究がなされている。
- ・従来から当該研究機関で行っている種雄牛や系統豚の育成・選抜は, 宮城県の試験研究機関の基本計画である「時代のニーズに対応した畜産物の安定供給のための研究」に寄与するものである。また, 受精卵移植技術など, 革新技術の研究も行っており, 当該研究機関の重点分野は基本計画にかなっており, 研究ポテンシャルも適切である。
- ・どの部門の研究も県内の畜産業に大きく貢献をされていて研究機関として素晴らしいと思います。

(2) 研究開発・技術支援等体制

- ・組織は酪農肉牛部, 種豚家きん部, 草地飼料部の3部構成のもとに7チームが置かれており, 各専門の研究を行う上で適切な組織体制である。
- ・特に問題ないと考える。

(3) 研究者の確保・育成

- ・農研機構への若手研究員の派遣や技術研修会等への派遣が行われているほか, 所属長表彰, 農政部長表彰, 知事表彰があり,モチベーションの維持・向上の方策が講じられている。
- ・農研機構への依頼研究員の派遣や農水省や外郭団体主催の研修会に積極的に職員を派遣している実績があ

る。

- ・若手研究員が希望する研究内容について研究員として派遣されたり、研修会等への派遣があるなど、新たな知識を得たり意欲が増すものへの参加は研究者の育成に繋がり良いと思います。フリーズドライ技術での知事表彰をはじめ、表彰が毎年あるのは良い研究をするうえでモチベーションが上がるので、是非良い研究に対しては高い評価をしていただきたいです。

(4) 研究施設・設備等、研究環境の整備

- ・本館は昭和52年に建てられてから45年が経過しており、法定耐用年数まであとわずかである。修繕費も増加していることから、建て替えの計画があってもよいと考える。少なくとも昨今の情報化社会に適応したWi-Fi等の通信システムの充実が必要である。
- ・昨今、イノシシなどの獣害被害が多発している現状から、畜産試験場においても豚熱対策として様々な家畜の防護を行っている場面を実際に見学した。これらは全て職員の手によるものとのことで、多大な労力が割かれていると推察される。施設や設備における防護対策は優先すべき事案であり、何らかの支援が必要と考える。
- ・制度や組織内の連携など研究環境は適切であると思います。施設の老朽化など目につくところはあったので、研究レベルを下げず、研究費を削ることなく修繕ができるようその分の費用が増えると良いのではないかと思います。

(5) 共同研究等産学官連携による研究内容の充実

- ・農研機構や大学等との受託研究が行われている。引き続き共同研究の推進を期待したい。
- ・東北大学や農研機構などと共同研究を行っているとの報告があり、特に問題ないと考える。
- ・高知大学との共同研究による哺乳動物のフリーズドライ細胞による遺伝資源保存は近年増え続けている災害時でも貴重な遺伝資源が守られ、さらには県の優秀な職員によってフリーズドライ精子での子牛の生産が可能になった、というのは説明を聞いていて特に印象的で素晴らしいと思います。

(6) 研究成果（成果普及関係業務を含む）の状況

イ 産業・社会的ニーズに貢献しうる成果が十分にあがっているか

- ・研究報告や学会発表等が多数あり、十分な研究成果が得られている。
- ・分娩管理の省力化やフリーズドライ精子による受精胚の作製に成功するなど、産業・社会的ニーズに貢献しうる成果が上がっていると考える。
- ・新しい施設を建てる、新しい機器を導入する、限られた一部の畜産農家しかできない技術、というのではなく県内の畜産農家全体で広く活用される研究成果は畜産業に貢献していて成果があると思います。

ロ 研究成果の普及体制が適切に構築されているか。また、普及実績は十分か

- ・定期的に得られた研究成果が「普及に移す技術」として公開され、研修会等が開催され報告されている。また、年報等が刊行されさらにHPにも掲載されて、情報が得られやすくなっている。
- ・直近3年間で今年度が最も普及技術の件数が多く、ニーズに即した実用技術の開発が行われていると考える。
- ・講習会、研究会を開き、技術支援を行い現場で新たな技術が普及するよう良い体制がとられていると思います。

(7) 技術支援関係業務等の状況

イ 当該技術支援業務が地域産業の高度化を直接的に促進する業務として組織全体の業務の中に明確に位置付けられているか。

- ・定期的に現地実証までの技術指導が行われている。
- ・混合堆肥複合肥料の作成や牛糞堆肥と硫酸を原料とするペレット肥料の作成について農協職員に技術指導を行うなど、技術職員への講習会を重点的に行っており、明確に位置づけられていると考える。

ロ 当該技術支援業務が機関における明確な方針の下で地域産業の高度化に十分貢献し得るものとなっているか

- ・普及指導員の研修ほか関係機関への講師派遣が実施されており、地域産業に貢献している。
- ・畜産農家の多様なニーズに応えられるよう時代に合った研究をされていて地域産業の高度化に貢献している。

と思われます。

(8) 研究マネジメント

- ・定期的に職員会議、部長会議、各種委員会が開催されているほか、フロー図も作成されており、円滑な機関運営がなされている。
- ・県内の畜産業がより良いものになるような研究ができるよう円滑な機関運営をされていると思います。

(9) 総合評価

- ・宮城県の農業産出額構成比が米に次いで多い、仙台牛をはじめとした畜産を支える研究機関として、十分にその使命を果たしている。今後も現場の課題を解決する研究や良質な肉質、安定した供給体制等に必要な技術開発等を積極的に行って頂きたい。
- ・全国的に高い評価の種雄牛の選抜やフリーズドライ精子による子牛生産の成功など高度な研究成果を出している。なにより地域への貢献度が高い実用的な技術開発を行っていると考えます。
- ・優良な種を県内農家に配付することで宮城の畜産業に貢献していて、一部の特別な畜産農家へ、ということだけでなく県内全体の畜産農家に広く活用されるような研究をされていて素晴らしいと思います。

(10) その他意見等

- ・コロナ禍や気候変動、ウクライナ侵攻等、世界情勢が急激に変化する中で、高齢化、後継者不足に加えて飼料価格の高騰等による畜産農家の減少、ひいては生産量の減少が懸念される状況にあり、みやぎの食を守るため早急に対応すべき課題が山積しています。特に飼料価格の高騰の影響は非常に大きく、国産飼料の増産に関する研究、実証は喫緊に対応しなくてはならないと思います。今後、この分野での研究の進展に期待します。
- ・部会長から「ICTを活用した取り組み」が今後必要になるのではないかという意見があり、場長からは「ICTを活用した取組というのは新しい施設に付随するものが多く、それらは現状の宮城県内の畜産農家の現状に則さないことから、当研究所では、簡易的でどの酪農家でも使えるようなICTの技術であるなら試験研究課題に取り組むことは可能と考えているが、いわゆる「施設型」というものについては、今のところ検討していない。」との回答があった。確かに、高度な設備が必要な試験や先進的すぎる研究は実際の現場にマッチングしないことが多く、「研究」だけで終わってしまう場合が多いので、その通りであると感じた。しかし、施設園芸を例に挙げると、施設園芸は震災の影響などもあり、当初は予想もなかったスマート化が急速に進み、研究事例が追い付いていないのが現状である。そのため、施設園芸におけるスマート化も、生産者のニーズにマッチングしたとは言えないものも多い。しかし重要なのは、はたから見て夢のある技術であると世間に浸透させたことなのではないかと思う。試験研究機関は、多少は夢のある(金のかかる)技術開発を行うことによって現場を牽引する役割も担っていると思うので、今後は多少なりともそのような研究を組み込んでいただきたいと思います。
- ・一次産業を取り巻く環境が非常に厳しい状況、時代ですが、県の試験研究機関の職員の皆さんの努力、研究の成果が広く地域に普及し活用されることを期待しております。

また、成分調整されたペレット堆肥や子実用トウモロコシの利用など、畜産業者だけでなく土地利用型の法人・農家とも協力し合い、厳しいこの状況をうまく乗り越えていくことを期待したいです。

5 機関評価表

別紙のとおり。